

《座談会》

# 外国人留学生の現状と課題、 将来の展望

長 合 忠 彦 (大学国際課長)

大 鉢 忠 (大学工学部教授)

太 田 進 (大学商学部教授)

玉 村 文 郎 (大学文学部教授)

—司 会—

大 下 尚 一 (大学文学部教授)

—出席者 (ABC順)—

大下 文学部の大下であります。国際交流の委員会などに比較的長く参加をしているというようなことから、きょうの司会役をさせていただくわけがありますが、留学生の問題は、ずいぶん多岐にわたっておりまして、私が全体の問題を把握しているというようなことはとても言えません。ご参加の先生方から、自由に問題の提起をさせていただいたらと思います。

最初に私が、留学をいたしましたのは、一九五七年のアメリカ留学でございました。サンフランシスコの港に着きまして、電話をかけるのに、二、三十分苦労して、とうとうかけられなかった。電話の向こうで「番号間違い電話です」とか、「こういうふうにかげなさい」というテープが回っているとは思ってもありませんでした。「パードン・ミー。いま私は日本から着いたのだ。プリーズ・スピーク・スローリー」と何回繰り返しても、交換手がガチャガチャと向こうで言う。こんなにアメリカは不親切な国だから、傲慢で帝国主義的と言われるのだと、半ば憤慨し、半ば屈辱的な気持ちを感じた。

こうした経験は、留学生諸君にも話したの

ですが、いまの私にも残っているような体験と結びついています。しかし、この楽しくない体験をアメリカの先生に話すと、アメリカ人でもちよつと違つたところへ行つたら困るのだと言つて、親切に先生が自分の失敗について思い出話をしてくださつた。留学生の私の気持ちがなごみました。こういった個人的な面と、非常に大きな制度的な面とがあるわけでありまして、その両面が留学生の急増している今日の状況では、留学生を直接取り巻いている困難な条件となつております。

同志社は戦前、普通の学校に入れない朝鮮から来ている人、あるいは中国から来ている人たちが在学しておりました。戦前の同志社で学んだことを、思い出してくださいている人たちが、韓国にはいまもおられるわけがありますが、その後、第二次大戦後は、同志社の国際性ということが言われておりまして、留学生の受け入れというような面では、とりわけ先駆けていった、あるいは十分な理念をもつて対応していたというふうには言えないだらうと思います。現在やつとこうした問題を、他の日本の大学に負けないように考へていく状況になつてきたのだ、と思います。

きょうは日本語教育の面で、日本全体でも留学生問題の大切な役割をはたしておられます。国文の玉村先生、一般教育委員長で、このごろは一年生から入つてくる留学生が多いわけでありまして、そうした留学生の直面する諸問題をお考へになつている太田先生がいらつしやいます。先生は、ご専門の中国語の立場から、中国からの留学生の問題を絶えずお考へであろうかと思ひます。科学技術の修得という面から工学部への留学ということは、留学の一つのポイントであります。工学部の大鉢先生がご参加です。国際課ができる前から留学生の問題とかかわつてこられた、国際課の長合課長もおられます。こうした方にお集まりをいただいて話をしていただくのですが、それぞれレパトリーがあるというわけではありませんので、自由に発言してください。

### 留学生受け入れ制度の充実を

**大鉢** 私が国際交流、留学生の問題にかかわるようになりましたのは、一九八六年に工学部の国際交流委員をさせていただいたときからです。ちょうどそのときに大下先生が同

じく交流委員で、学長からの諮問に答へるべく、国際交流についての答申案をつくるために、チームをつくつて研究させていただいた。その委員を四年間さしていただいたというこゝとで、少しは国際交流について私も勉強させていただきました。

自身の経験としましては、一九七六年からイギリスのバース大学に一年間と、それから続きましてアメリカのアームストカレッジに一年間の在外研究があります。自分自身が在外研究をしたときに受けた印象を紹介させていただきますと、まず最初に留学に關しまして。私自身は留学生じゃなかつたのです。最初にそのまちに行きまして、それから近所の方にお伺いしますと、「小学校はここここに行つたらよろしい」と。小学校の校長先生にお会いしましたら、即、次の日から学校に来てよろしいと、そういう形で子供達を受け入れていただいた。ところが、日本にお

りまして外国の方が来られる、なかなかそういうふうにはスムーズに受け入れてもらえない。このような違いを体験しましたので、留学生の方々を世話するときに、自分たちの制



長合忠彦氏

度でこうしなさい、ああしなさいじゃなくて、まず最初に受け入れるということからスタートできないものかと考えます。それが私の最初の国際交流に関連して留学ということを受けたイギリスでの体験です。

その後、さきほど申しあげた国際交流を大学としてどのようにするかということで、プロジェクトチームの一員として関東の大学へ調査に行ったりしまして考えたことは、同志社大学とほかの大学とはいろいろ違いがありますが、同志社大学においては、個々には考えられているんですけど、本質的なポリシーがまとまって核となるようなものがないんじゃないのかなという印象を受けました。

また、現在、文部省が進めております二十一世紀には十万人に留学生をふやしていくと

いう国としての方針に大学が無関心であるような感じを受けます。今後留学生の人数がふえるということに関して大学がどのように考えていくかということをも、考えていく必要があるんじゃないかと思えます。

先ほど工学部への留学が留学生の大きな点とおっしゃられたんですけど、留学生を受け入れることから言いますと、大学の中におきましてかなり人数の少ない学部ではないかと思えます。工学部としても今後、留学生の方を受け入れることに関して積極的になつていければなど、こういうふうに思ったりしますが、まとまりのない話しなのですが、自己紹介を兼ねまして私の考えていることを紹介させていただきます。

大下 ありがとうございます。では太田先生。

太田 私が組織的な形で留学生問題にかかわったのは、比較的最近なのですけれども、私自身、中国語を教え専門が中国の現代文学であるということもあって、中国からの留学生とのつき合いがずっとありまして、同志社大学の留学生の受け入れについて、いろいろ問題があるということを考えておりました。

教授会などで、具体的に発言をしてきたことはあるわけです。いま一般教育委員長という立場にありますと、特に田辺における留学生の受け入れについては、制度的な問題として、はなはだ不備であるということを感じております。最近では一回生から入ってくる留学生がかなりいるわけです。そうしますと田辺にまず来るわけでして、そのときに留学生の面倒が見れているかどうかということになりますと、制度的にはきちんとなつていないのです。

それから学部は商学部なので、学部教授会でいろいろ指導を担当された個々の先生方の意見を聞いておきますと、やっぱり日本語能力にいちばん問題を感じておられるというふうな。だから現在では玉村先生なんかのご尽力によって、同志社大学の中で留学生に日本語を教えるということはあるわけですけれども、それでもまだ不十分だと思えます。カリキュラムの面でも充実さしていかなくちやならないんじゃないかということを感じております。

それからもう一つは、外国のいろんな大学

との学術交流から交換留学生とか、あるいは留学奨学生を受け入れるというふうなことが出てきて、これは日本語能力の問題ともからんで、たとえば英語による授業を今年度からは細々といますか、つくるようなことに、これも玉村先生にご尽力いただいでやっていくことになるわけですけれども、そういう面でも今後もう少し充実したカリキュラムが組めるというふうなことも考えていかなくちゃならないのじゃないかと思っております。

**大下** 問題がずいぶん広がるかもしれませんけれども、しばらく問題を出していきましようか。つぎは玉村先生。

**玉村** 玉村でございます。私は文学部の化学科国文学専攻に属しておりますが、同志社に着任する以前から留学生教育にかなり長



大鉢 忠氏

い間タッチしておりまして、一九六五年ごろから海外に行つて教えたり、それから海外の日本語教育にタッチしておられる先生方のところに巡回で特殊講義をして回るというようなことを何回かしてきました。最初は大阪外国語大学とか京都大学の留学生に教えておりましたが、そして同志社大学には七四年に来ましたが、当時はいまのような留学生関係科目というものが皆無でして、正式に三科目ほどでスタートしたのが十年ほど前だったかと思えます。現在は七科目、それからこの秋からまた、カリフォルニア、ハワイの学生のための新しいコースも設置されますので、だんだん充実してきたというふうに思っております。あとあといろいろ皆さんのお話しに触発されて、またその都度、感想とか意見を述べたいと思えます。すでにご説明ありましたこととは別に、私が申し上げたいと思つてることがあります。

#### 国費・私費留学生の生活・ 学習の格差の是正を

私どものところには、国費留学生とか、新島基金で迎えられている学生とかが何人かおられますが、そのほかに自己負担で来ている私

費留学生もかなりいます。もちろん本人の向学意欲とかで、生活資金などあまり細かいことは気にせず日本に来たという経緯もあるうかと思いますが、同じクラスの中でその両者を見ておきますと、生活、学習の面でもあまりにも格差が大きい。それを何とかできないかな、格差を縮めるといふふうな方向にもつていけないかなあという気持ちがとても強くなりました。もう四月からしよつちゅう、民間奨学資金の推薦状を書かされるのです。いつもあまりゆとりがなくて、掲示を見たのがきのうで、締め切りがきょうの四時とか五時とかという状態で、とにかく書いてくださいと頼まれることが多いんです。奨学資金の締め切り間際には、三人分も書かされることがあります。同じ書くならなるべく通るようになしたいと思えますので、入念に積極的な評価をして、奨学生に採用されるように心がけます。こういうことが、突発的によく出てきますので、一層私たちはその格差のことを強く印象づけられるのです。

それから日本語力がことがお話しに出ておりました。本学に特別学生という制度がありますが、海外からの特別学生の場合、日本語



太田 進氏

力が未知数で、推薦者とか、あるいは出身学校とか専攻とかで推測するしかない。それで受け入れてから、入学後の措置の面で多大の苦勞を伴うということがあります。中にはごくごく一部のことですけれども、本来の学習のための留学とはちよつと考えにくいような、つまり就勞が本来の目的であつて、ビザを取るために大学に籍を置くというような学生がなきにもあらずです。そのチェックが非常に難しいのですけれども、一つは入学のときの日本語力の審査をなるべく厳密にするということ、ある程度整理ができるのじやないかと思つております。入学後大学の講義を、不十分ながらでも聞けるということになりますと、相当高いレベルの日本語力が求められているはずで、いわゆる留学生の日本

語能力統一試験一級というのが条件になっていますが、その一級というのも、実際は大学入学のために一級があつたのではありませぬ。もともと前から四級、三級、二級、一級とあつたのに、大学側が参考に使わせてもらうことになつたわけですから、本来は大学教育を受けるための日本語能力の審査という、まあ超一級のようなものがあつたほうがいいと思つています。あとでまた申したいと思いますが、漢字圏の学生でしたらヒアリングのテストはクリアができなくても、独学で一生懸命やれば三、四カ月で三百点ぐらい取るこゝとができると思います。つまり漢語とかか文字だとかのテストがわりあい多いのです。四百点満点のうち三百点というのは好成绩なんです、三百点取つて大学のいろんな講義が何となくわかるか、特に耳で聞いてわかるかとか、あるいは口頭発表ができるかということになると、やはりたいへん不十分だと思ひます。そういう点でその入口のところの見直しといいますか、あるいはもつとなるべく十全な形で進められるようにできたらと私は考へております。

### 学年暦の見直し

それから制度的なことからみますが、日本では、小学校から大学まで、春の四月が新学年ということになっていますが、多くの外国が秋九月スタートですね。韓国、インドネシア、タイのように二月、三月、ということもありませんが、大半は秋が新学年です。そのためにどうしても半年はずれ込んでいく、そうしますと、この制度を抜本的に見直す必要があります。これは一同志社の問題じゃなく、日本の大学全体がこのことを考えるべき時期にきていると思ひます。制度が大幅に改善されるまでも本人の事情とか本国の事情で、出国が遅れて日本に来るのが遅れるということがままあります。一般の講義が聞けない国費留学生は、大阪外国語大学などで事前教育、日本語の特訓を受けるわけですけど、来日が遅れたためにそれも不十分なまま出てくる。経済学部に来た国際経済をやつていたアルジェリアの院生の場合には英語ができない、日本語も非常に不十分である、漢字はゼロでした。そういうときは結局、個人的な解決しかできないのです。つまり私の近くにい



玉村文郎氏

て、積極的に無報酬でとにかくサービスをやってみようという学生を探して、やってもらいました。事後了承的に予算を工面してもらって、あとで何がしかの謝金を出してもらったこともあるのですけれども、こういうケースについては、予算上の配慮がほしいですね。既設のチューター制度とは別に、留学生用のチューター制度というのをもっと積極的に制度化していただくことが、過渡期の措置としても必要です。それから九月入学というようなことが単位の上でも、制度としてもどんどん進められるようになって、やつぱり臨時的に遅れたり早く来すぎたりということがありますので、そういうときの予備的な措置というのをなんか前進させていただきたいと思います。

大下 ありがとうございます。いまお話は、日本語教育とその周辺のいろんな条件、環境といったお話しであったと思います。

この座談会を読んでいた方には、たとえば、「特別学生」という言葉も十分に理解されないと思うのですが、「正規学生」という形で同志社の普通の学生と同じ力があると認められて入ってくる留学生と、特に語学の面もあると思いますが、入学に必要な、能力が十分認定できないので特別学生として入学を許可される留学生があります。そうした制度の問題なども含めて国際課長に、同志社の抱えている問題を他の学校と比較しながら、紹介していただいたらどうでしょうか。

長合 私が留学生にかかわり始めましたのは昭和五十年に、学事課に国際係ができたときからで、その国際係を六年ぐらいいやりました。その後人事異動で、直接、留学生とは関係のないところで仕事をしていました。国際課には二年ほど前にきて、留学生関係の仕事を再び担当するようになった次第です。

同志社の国際課は、留学生の受け入れのみならず、日本人学生の送り出し、それから学術交流といえますか、教員・研究者の交流、

その他国際交流全般にわたるいろんな仕事にかかわっている、そういう部署です。きょうはテーマが受け入れのほうの外国人留学生に関する問題ですので、この辺に焦点を絞って少しお話をいたします。外国人留学生に日常接しておりまして感じますのは一口でいいますと、留学生の受け入れというのはきれいごとでは片づかないということです。

国際化とか国際交流とか、最近は特にそういう言葉がよく聞かれますがその実態はいろんな問題を含んでいるわけです。外国人留学生が同志社での勉学を終えてそれぞれの国へ帰る、あるいは就職をするといった段階になって、ちゃんと同志社での、留学が効果があったというふうに思ってもらうためには、同志社として改善をしなければならぬところがたくさんあるかと思えます。受け入れの入口といえますか、留学生の入試から始まりまして入学後のいろんな教育指導の面、生活指導の面、それから卒業後のケアのことも視野に入れて考えていかなければならないことが多々あります。どの部分をとりましても、これは同志社だけに限らないかと思えますけれども、いろんな問題を抱えております。



大下尚一氏

### 留学生受け入れの方針を明確に

私は最初に二つだけ、同志社で仕事をしていて問題として感じておりますことを申し上げます。一つは留学生受け入れについてはつきりした方針といえますか、考え方といえますか、これが確立されていないということです。願書を出してきたから、志願者があったから受け入れていくというふうなところがあがりがちでして、入学試験制度につきましても、ようやくあらかじめ試験科目等を入試要項に明らかにするようになったところです。やっとそこまできたわけで、なかなか留学生を大学のちゃんとした構成員として認識し、位置づけるということができていなくて、一体どれぐらいの学生を受け入れていけるのか、い

こうとするのか、またいくべきなのか、この辺のところはどうも明確になってない、そういう思いを強くしております。特にこれから留学志願者がふえてくると思いますけれども、定員ということもありますし、日本人学生とのバランスとかいろいろ考えなければならぬこともあろうかと思えますけれども、この辺は本音で十分議論をして、同志社大学としてはどれぐらいの数の留学生を受け入れて教育していかなければならぬのかについて、できるだけコンセンサスが得られるように、各教授会等で十分議論していただく必要があろうと思っております。

二十一世紀初頭に留学生を十万人にという構想に必ずしもこだわる必要はないかと思いますが、一つの目安として申しますと、いま同志社は学生数が大学院、学部を合わせまして、約二十万人かと思えます。留学生が特別学生を入れて二百二十七名ということは一%強ということになります。文部省が言っておりますこの十万人構想というのは、留学生が高専教育の学生全体のざつと四、五%という計算に基づいていますので、仮に同志社にその数字を機械的に当てはめますと、二万人の五

%としますと、千人ぐらいいになります。何もその千人がまず先行するのじゃないのですけれども、留学生を受け入れているということがいえるためには、やはり数的な内容の吟味が必要でです。その辺についての大学としての方針というのでしょうか、理念というのでしょうか、この辺が明確でないという思いを強くしております。

それからもう一つは、これは広い意味での受け入れ態勢の中で国際課の組織上の問題です。いろんな国際関係業務にかかわっているセクションでありながら、現在の同志社の国際課というのが、教務部という大きな部の中の一つの課として位置づけられているということ、それから専任職員の人数のこともあります。本当に実のある国際交流をし、留学生をしつかり受け入れて、しつかり教育をして魅力ある同志社大学という理由で、国外からも高い価を受けるためには教学面に加えて組織面での充実を本腰でやらないとだめです。現在のスタッフでは充実した国際交流というのは難しいという気がいたしております。

こういうふうな問題以外にも幾つか感じて

同志社大学外国人留学生受人数推移

年度	学部			大学院			合計	
	正規学生	特別学生		正規学生	特別学生	小計		
		AKP	AKP以外					
1978	0	21	1	22	8	1	9	31
1979	0	26	0	26	7	1	10	34
1980	0	27	0	27	5	5(1)	10	37
1981	0	28	0	28	5	6(2)	11	39
1982	1	25	4	30	8	6	14	44
1983	7	34	4	45	11	5	16	61
1984	14	34	6	54	14(1)	4	18	72
1985	22	39	11	72	18(2)	9(1)	27	99
1986	32	41	21	94	24(2)	12(1)	36	130
1987	43	52	13	108	33(6)	6	39	147
1988	42	48	23	113	39(5)	13(2)	52	165
1989	52(1)	55	30	137	41(6)	15(4)	56	193
1990	56(1)	55	45	156	47(10)	24(3)	71	227

( ) は内数で、国費（文部省奨学金）留学生

いることがありますが、それはこれから話が進んでいく中で、述べさせていただきます。たらと思っております。

### 日本語教育の問題点

大下 具体的に学生が入学してくるときの能力の問題ですとか、あるいは入ってきてどういう形で講義をとっていくかというように

問題ですね。それがある程度留学生の需要にあわせて、欧米から短期に入ってくる学生には英語で授業をするといった試みになってきました。さっき太田先生がおっしゃったように、ほんの小さい態勢ですけれども、行われるようになりました。しかし、それをめぐっても、そこまでする必要があるのかと、英語で講義までしてやって留学生を受け入れんならんのかという、批判の声もある。そういう問題が大学としてはあるわけで、全学的な受け入れの制度が、一つの問題だと国際課長がおっしゃった。でも、大学というところは制度だけできればいいというわけではなくて、その制度を活用する全学的なコンセンサスというようなものが実際の教育の場で生きてこない、まだまだだということがあって。そしてまた、日本に留学してくる人たちも、一体何を求めてくるかということが、はつきりしない。世界の急速な動きの中で、若い人たちを中心に日本へ向けられた関心というものは、非常に多様な留学目的としてあらわれてくる。何と言っても、日本で勉強する以上は、日本で勉強できる能力すなわち日本語の力が必要なんです。アメリカに留学をす

る者で、英語は要らんとって留学する者はない。英語の力をつけ、さらに生活態度としても、アメリカ文明のいき方を身につける。それが、帰国した場合でも非常に役に立つけれども、日本の場合には、日本の技術の力をも身につけたい、あるいは、欧米に行くには遠い、近いところにしよと日本に留学する。しかしながら、日本語までを身につける必要はない、自分は日本研究者になるわけではない。国際的に日本語より広く通用する英語で日本の技術が習得できないかとか、やってくる学生が考える。その辺、どうでしょうか。広い意味での日本語教育というような面を中心に、もうちょっと同志社の現状を、自由に発言をしていただいたらどうかと思うのですが――

大きく分けて同志社にきて四年間、学部で勉強しよう、あるいは大学院でより専門的な面を勉強しようというのと、一年ぐらい日本を知るためにやってくるのがありますね。最近では単に日本文化というだけじゃなしに、世界において非常に大きな指導力を持ち、日米関係でも非常に重要な役割を果たしている、日本のことを教養として、あるいは肌の感覚と

して知ることが必要だというわけで、日本に留学をしてくる。これがアメリカあるいはヨーロッパの学生に非常に魅力的なことにもなっている。ですから、留学生は、大きく分けると三ぐらいに整理できるのじゃないかと思うので、全部を同じように日本語の問題としてとらえるのも、これはかなり乱暴な話じゃないかと思えますけれども、その辺、個々のケースなどにも触れていただいて、日本語教育の問題を議論していただいたらと思うのですが。

先ほど大鉢さんが言われましたが、同志社の国際化の問題をめぐって原学長時代に答申をつくりましたとき、日本語教育では歯切れがよくなかった。いきなり何十人も日本語教育をしていただける先生を同志社が持つというようなことは、これは不可能なことであり、現実的に考えますと、これは非常に難しい問題です。

**大鉢** やつぱり予算的な問題でしょうね。理想を言えば、もちろんこちらに來られるまでに準備されてくる、それから準備が少し不十分であっても、それをさらにこちらで補えるというような制度があればいいのですよ

ね。たとえばスタンフォードの大学ですと、外国人のために英語を教えるクラスというのがたくさんありまして、留学する人はそこで勉強して、さらに英語の力をつけるというのがありますね。日本の場合でも国立なんかですと、そういった外国の方のための日本語教育の組織というのがあるので、なかなかかわれわれのところでは必要を感じてもやれないような状況になっているのじゃないでしょうか。一般教育の科目で日本語のそういったことを補うことをやっていられるのですけれども、積極的に外国人のための語学教育とすることがあるといいのですが、この座談会に來るまでに、「二十一世紀からの留学生政策」を読みました。が、ますますそういうものも充実させながらやっていかないと対応していけないというような気がしました。

**太田** 専門教育と並行して日本語教育が行えるというそういう態勢にはないと思いますね、いまの同志社。

**大鉢** いまはない。

**太田** だからそういうことができるようにならないと、政府が打ち上げている十万人の受け入れ、同志社では千人程度の受け入れ、

そういうことにはつながらないと思います。大学として制度的に受け入れられる、あるいはきめ細かい指導を含めて受け入れられる、そういう態勢をつくっていくことの中で、留学生の受け入れ数も増大していけるということだと思います。

**大鉢** 大学としてやはり、こういう国の方針にどう取り組むかということを考えないといけないという気がしたのです。いままで十万人構想とかという言葉を聞くだけでした。

実際に、他の大学を見ますと、年に一四%ぐらいずつ人数をふやしてられるところもあります。われわれのところは自然増の形でしか対応してません。もしいまのまま人数が膨張しましたら対応がつかないわけです。同志社はそうすると私立大学ですから国の方針とは関係なく、人数をふやしませんというのか、やはりこういう国の方針に従って増やすのか。国の方針というよりも、むしろ世界の中で日本が果たす役割をどう分担するかということかも知れませんが、そうすると、いまおっしゃったように、千人の人数が出てくれば、その千人の人数をこなすにはどうするかという格好で考えていったらいいのじゃない

かなという気はするのですけれども。その中で先ほど先生がおっしゃった日本語の場合には、やはり外国人のための日本語のクラスというのも考えるような方向で検討ができればという気がします。

**長合** 私はもちろん日本語教育の専門家ではありませんけれども、使用言語については大学は、多様な形で受け入れられるようにすべきであり、少なくともそれを目指すべきだと思います。ですから日本語が完全かどうか、きちつとできる学生を受け入れると同時に、その分野によつては、あまり日本語にこだわらなくても、たとえば英語でもって指導できるという分野については十分な英語があれば受け入れることができるというふうな幅の広いというか、ふところの深いというか、そういう大学に同社社がなつてほしいと思うのですけどね。

**大鉢** ぜひそうですね。

**長合** 日本語を決して軽視するわけじゃありません。日本文学をやる人が日本語がからつきできないのじゃ、これはお話しになりませんけれども、いろんな目的を持った学生が存在しているわけですから、その目的に応

じて大学のほうはキメ細かい、多様な対応ができるというのが望ましいのではないかと思うのですけれども。

**大鉢** ですけど、やはりその多様な中の一つとして、いまの日本語の教育というのもある程度充実するといいいのじゃないですかね。

### 何がネックか留学生の日本語力

**玉村** ごく初期のころは学部留学生というのはあまりとつてなかつたのです、同志社だけでなくて一般的に。大学院レベルで、本國でとにかく大学を卒業している人をとるというのが多かつたのです。昭和二十七年ごろはインドネシアの賠償留学生というのが、各国立大学に配属されて京都にも来ていたのですけれども、昭和三十数年ごろからだんだん留学生の数がふえてきました。そのころは学部留学生というのはずかな私費生を、府中にあります東京外国語大学の附属日本語学校に入れて、一年間インテンシブのコースを受けさせる学部志望の国費生三十数名だけでした。東外附属に入った学生はそのあと全国の国立大学に配属されていきました。それは比率から言いますと、大学院生と比べると四対

一、あるいは場合によつては六対一ぐらいでした。その国費の学部生というのはいまもあんまりふえてないのです。大学院生はどんどんふえています。私費の学部生というのがいまふえてきたというのがここ数年の現状なのです。日本語力についてはたとえば日本文学専攻とか、本國に帰つて日本語の先生になりたい、それから文化史の日本史を専攻するというふうな場合は、これは通り一遍の並みの日本語、つまり一般の留学生の日本語力と同じであつてはちよつと困ると思うのですけど、それ以外は私は専攻によつてかなりいろいろな幅があつていいと思つています。

以前の経験した例についてお話しします。大阪外大は留学生別科で国費留学生だけを受け取つているのですが、その場合、半年コースですから正味四カ月半なのです。四カ月半で大体四百時間ぐらゐ、漢字とか文型とか会話とかを教えます。その中でとにかく最終試験をクリアしない者はもう半年延長させるということでありまして、たいていいろいろな状況を勘案し卒業させていたのですが、あるとき私のクラスのメキシコの学生が、なかなか勉強が進みませんでした、半年延長になつ

たことがあります。かれは美術の専門でして、私は弁護人の立場のほうでしたから頑張ったのですけど、次の学校へ行っても困るからというので延長になっちゃった。ところが、バスツアーで姫路のほうへ行つて鉄鋼所とかを回ったのですが溶鉱炉の火と溶けた鉄の色を見て彼は動かないのです。私は、「彼はああいうところに自分の研究対象を持っているのだから、今度は卒業させましょう」と言つたら、みんなが納得ということになりまして、卒業させました。大体美術とか建築とか、また数学とか音楽とかというふうな分野は直接、漢字でどうこうというようにあまり日本語そのものがつよく求められないところで。まあ建築でも建築史とか日本建築なんかやるのだつたら変わってくると思いますが。ですからそれは学問分野によつて変わらると思うのです。ただ問題は、一般教育の科目がありますね、外国語八単位ずつですか、それから社会、人文、自然科学という三分野、そういう科目の講義を受けて単位を履修するというふうなこと、(大学院の場合はそれがなくて、最初から専門だけになってしまいますから、日本語を必ずしも高度に期待しなくてもいいという

ことがあるわけですが)専門教育以前の一般教育というところで非常によく問題になるのです。最近、大学設置審議会でしたか、一般教育と専門教育の規定を、必ずしもそんな枠にこだわらずに融通むげにやる方向を打ち出しました。もし多くの大学でかなり自由にやるということなら、そのことについては是非の論が必要だと思つたのですが、留学生にとってはある意味でプラスになるだろうと思つています。

### 欧米系とアジア系の留学生の違い

いちばん問題なのは、欧米系の学生と漢字圏の学生とがやっぱりどこまでも質が違うということだと思います。同志社にもドイツの学生とか、AKPの学生がたくさんいますし、非常に積極的に話しますね。本国で二年ぐらい、週四時間日本語をずつとやってきて、自分はかなり日本語ができると思つているのですけれども、最初は話がほとんどできない学生も少なくありません。ですから、二、三カ月しますと、頭の中に入っていた文法とかいろんなことが少しずつ触発されて活性化してくるわけです。ですから、それでだんだん対応で

きるようになるのですけれども、そんなに漢字とか平仮名ばかり見ているわけじゃないので、最初のところの二、三カ月というのは、本国で二年やってきたという効果がストレートには出ない、なんか潜在的なエネルギーみたいな形でしか存在しないようです。漢字圏の学生は、これはものすごく早いのです。マレーシアなんかでもネイティブの人が向こうの国費でよその大学に送られてきてますけれども、その場合も、チャイニーズの学生にはずつと差をつけられましてノイローゼになるのです。そういうときには結局一べん本国に帰つてきなさい、元氣になったらまた来なさいと一カ月ぐらい帰国させるといふようなことを、大学によつてはやっていきます。結局、日本の大学でいろんな学問をやつていくときに、(もちろん英語はつかりでやれるというふうなシステムもごく一部にはあるのですけど)普通は学術用語その他が漢語でできていますから、それを耳で聞いてパツと理解することが必要です。ところが、それができなければ非常にしんどいわけです。

ある大学の法学部が帰国子女枠で数年前に一気に十人ほど入れたことがあります。日

## 大学別外国人留学生数

大学名	留学生数(A)	学生総数(B)	留学生占月率(%) (A/B×100)
亜細亜大学	480	7,591	6.3
中央大学	195	29,732	0.7
法政大学	316	27,502	1.1
ICU	194	2,306	8.4
関西大学	161	23,921	0.7
関西外国語大学	285	4,901	5.8
慶応大学	537	26,666	2.0
近畿大学	247	24,050	1.0
関西学院大学	48	14,091	0.3
明治大学	295	34,815	0.8
南山大学	119	5,480	2.2
立教大学	110	12,001	0.9
立命館大学	294	21,838	1.3
竜谷大学	126	11,215	1.1
上智大学	495	11,417	4.3
拓殖大学	638	9,782	6.5
東海大学	348	30,903	1.1
早稲田大学	1,019	46,832	2.2
同志社大学	227	21,355	1.1

注：数字は、1990年6月28日付ジャパン・タイムズ "Japanese Private Universities Accepting Foreign Students" より

本人なのですが、外国で十六年ほど過ごして帰ってきたもので、府中の日本語学校で一年間勉強してきた外国人よりも漢字力が弱いのです。それが法学部に入りました。私は、『六法全書』なんかと無縁に過ごすことできないわけですから、どうするのだろうと思いましたが、外国人留学生のクラスにその日本人女子学生は出ていたようですけど、二回であとは出てこなくなつたということです。フオーロでできなかったようです。ですからやっぱり育つてきた環境でかなり幅がある。ですからい

まのように一、二年生の間どうするかということですね。直接私は教えてないのですが、本学にアマニ君というアフリカの考古学専攻生がいます。いまは大学院の後期課程までです。つてますけど、彼が来たとき、ものすごくしんどかったです。ですけど周りが温かく支えてきましたから、いまでは学会発表もできるようになりました。ですから短期的に見てはいけない。けれども、先ほど冒頭で長合課長がおっしゃいましたように、とにかくきれいなことでは済まないし、入念にやろうとすれば、

時間と人とお金が必要ということは、これは紛れもない事実です。先ほどの一般教育と専門教育、専門でも学部段階より、大学院の場合、もっと小さく狭くなりますから、そうすると本国で一定の水準にまで達していたら、わりあいそこはスイッチがしやすいということがあると思うのですが、やっぱり学部学生が日本語の問題ではいけばんだきいです。

### 留学生の急増は、 個々の留学生の対応を入念に

それと「十万人構想」というのは、ある意味で日本のトップクラスの人がアドバルーンのように上げたけれども、先行きどうなるのか、このごろあんまり大きな声では言われなくなりました、あの線で同志社大学の受け入れ数をはじきだせば千人そこそこになるということでした。ところが同志社に限らず、ほとんどの大学、都市部の国公私立大学というのは、実はこの表にありますように、(これは国公立は入つてないのですけど)トータルとしては決して一〇%にはなっていない。ところが、細かい分野ではもう過飽和なのです。

たとえば、私は国語学担当なのですけど、言語を専攻している学生というのは、いまマスターコースで日本人が三人です。留学生は正規学生が四人、特別学生が二人、ですから演習をやっても、日本人の常識で大学院生だからこうこと言っても、それをもう一ぺん説明し直さなければわからないということが多く、進度が遅くなったりして、いろんなことで言うなれば過飽和な状態が一方で起こっています。一部では何も細かい専門分野のことは気にしない、とつてくれるところに入ればいいという、つまり学位とかステータスだけを考えてくるところもありますね。日本ではちよつと考えられないのですけれども、本國で日本語の先生だったけど、東京経済大学で国際経済をやります。というふうには大学院に行くときはパツと変わる。それは本國の指示もありましようし、それからとつてもらせるからとか、奨学資金がいただけるからというところもありましよう。最近、京都であった例では、入管に出した申請では経営学だったか経済学だったかの勉強をしたいと言つて来た、そして実際に入つたのは、仏教系の文学部しかない大学だった。ビザの延長を申請し

たが、大阪の入管はそれは就学目的が大幅に変わったから認められないということになった。この場合は、大学側がいろいろ折衝して、最終的には入管のほうは認めたようですけれど、本来の入国目的と違つたほうに変わるといふのは、日本側ではほとんど考えられないのですが、外国人の場合簡単に変わります。欧米系の学生は日本に来る前にかんりの程度まで日本語を勉強してくるといふふうになっています。国費留学生で日本語学習歴なしといふふうにはわれわれが踏んでいても、日本に来るといふことが決まったら、すぐに平仮名とか基本文型とか日常のあいさつだとか、そういうものを一応マスターしてきますので、一カ月ぐらいの日本語学習歴を持つて来たといふのが、一応のスタートラインになるわけです。そして又、本國で日本語をやつてくるという層が広がつてきていますので、イギリス、ドイツなんかでも社会人でオフィスに勤めているとか、弁護士をやつていたりとか、経営管理をやつていたりとか、そういう人が日本経済のあり方というので、弁論大会をやつて堂々とした発表をするというようなことが欧米のほうでは広がっているわけです。こういう

傾向は全世界的なものです。しかし、アジアから来る学生の中には、とにかく日本列島に着けばいい、日本語力ゼロでもいいといふような考えの学生があります。同志社大学でも田辺で実際、入学を許可してからも、何時間目にもう一度来てくださいと言つても、それがわからないという学生がいたりするのです。そこら辺のギャップがある。数をふやしていくということは、当然細かい個別の対応を入念にやらざるを得ないということになると思ひます。

現在いちばんやりやすいことは、入学の審査のとき、なるべく単位取得の可能性をめどにした審査方向をとることでしょう。大学教育ですから特別学生とはいつても、ゼロではちよつとぐあい悪いと思ひます。つまり一年間日本語を勉強しても、それは通常の日本語会話のレベルで、大学の教育を、正規学生として受ける、一般教育でいろんな単位をとつていくというのが難しいと考えられる学生は受け入れにくいと思ひます。全国の国立大学の教養部長がいつも五月ごろに会議をします。そのときの第一議題は、全部外国人留学生の外国語学習の指導のあり方です。つまり

香港から来て英語はわかっているけど、英訳和訳の和ができないというふうなことがあって、その上、フランス語があったりドイツ語があったり。学部によっては語学が指定されてますね、第二語学はドイツ語であるとか、そういう点で語学が先生方にとつても、学生たちにとつてもたいへんしんどいということですね。

大下 いま、欧米系の学生は比較的語学も勉強してくるとおっしゃったのですが、これは学部の教育を受けるのか、大学院なのか、あるいは、特に日本研究ということなのか、その辺ちよつと整理していただいたら。

玉村 大学院生の国費留学生で日本語のプログラムに配置大学に行きますけれども、そうでない初級とか中級という場合は、大阪外国語大学のほうに配属されて、最低半年日本語を勉強します。初級というのは、いちばん最初私たちがタッチしたときは、本当のゼロといふのが多かったのです。ところが、最近では全くのゼロというのはなくて、大体平仮名はマスターしています。みんな国を出る前にその程度のことは勉強してくるといふふうにな

ってきているのです。学部のほうも大体ゼロでなくて、一カ月ぐらいのインテンシブコースを終わってきているぐらいというのがふえてきている、国費留学生の場合ですけど。ですから、わりあい積極的によくできる層、日本語は別にして一般的によくできる層です。

それから、学部レベルで来ますのは、これは私が全部承知しているわけじゃないのですけれども、たとえば、京都外国語大学がドイツの学生を中心に、イタリアとかフランスもまじつていいいますが、三十名ほどを、この夏休みに引き受けています。つまり向こうからの短期夏季セミナーで日本に来た。あちらの大学の場合は大体複専攻制度をとっているところが多いので、私は国際法です、そして一方では日本語ですというような学生がだいぶふえているようです。午前中は日本語をやつて、午後は専攻のお話を聞いたり、市内見学をしたりする、この場合は全部日本語でやっています。ところが、来たときは普通の試験をするとあんまりできないようですが、一週間たつと見違えるようになる。普通ですと、学部で留学する場合でも、ちょうど今秋

から来ますカリフォルニアの学生なんかと大体同じだと思いますけれども、本国で副専攻か第二語学かわかりませんが、日本語を勉強しています。そういう人たちが短期、あるいは一年来日するというふうになってきています。しかし、アジアから来るのは在学中途中で来るというのがほとんどですね。短期大学を卒業して、そしてこちらの三年編入とか、あるいはもう一べん一年からというのはありますが、やはり日本語をほとんどやっていないという人が入ってしまうことがあります。いままでの例で数は少ないですけど、特別学生で入れておいて、最初二週ほど顔を出して退学届も何も全然出さない。仲間の学生に聞きますと、あの人はもうアメリカに行きましたなんていうのがありまして、こちらが一生懸命やっていることが、なんかのれんに腕押しみたいになっている場合があります。たけれど、これはいたし方ないことかとも思えます。

#### アジアからの留学生

大下 アジア諸国から同志社大学の、学部に来るのは私費が圧倒的に多いですね。こん

なにアジアから学生が急増してくるというよう  
なことは、考えてなかったですね。これは  
日本政府の十万人構想ということも多少関係  
あるでしょうけれども、日本に留学したいと  
いう層がアジア諸国に非常にふえているとい  
うことも事実です。私なんか、中国からこん  
なに日本に留学生が来るというようなこと  
は、想像もしなかった。特に技術を習に来る  
とか、日本文化を研究に来るといようなこ  
とがあつても、資本主義の国に、社会主義の  
国から学部教育を受けに来る学生が出てく  
るとは考えられなかった。現実問題として、  
経済の発展というものが進んでいくと、進学  
希望者が増加して、その国の高等教育機関で  
は十分でなくなりませう。ですから、他の国  
に行つて高等教育を受けざるを得ない。特に  
経済的に豊かな地域に勉強しに行くことにな  
るのでしょうか。

### 留学目的をはつきりと確認

木田 全国的にも、同志社でもそうだと思  
うのですが、八割以上がアジア系の留学生で  
すね。いま工学部の三回生で中国から来てい  
る学生、一回生に入ったときには、私、日本

語ははなはだおぼつかないと思つていまし  
た。ところが、いまは日常会話はほとんど困  
らないようにできます。レポートなんかはど  
の程度書いているのか私は知りませんけれど  
も、自分の勉強したいことがはつきりしてい  
て、その勉強のために必要な日本語というの  
は、それは一生懸命日常生活の中でやつてい  
るわけです。それがいま、かなり身についた  
状態になつていと思ひますよ。だから、そ  
ういう何を勉強するのがはつきりしている  
学生というのは、アジア系の学生でもきちん  
と日本語を専門の勉強しながら習得してい  
くということが現実にあるのです。ところが、  
就学目的というのはあんまりはつきりしな  
い、とにかく日本で勉強すりやいいのだから  
うふうな、あるいは目的がちよつと違つたこ  
ろにあるという学生がいまいわけじゃありま  
せんので、それは留学生の受け入れの問題と  
して基本的に考えんならん問題だと思ひま  
す。

### 留学生のための尺度

大鉢 先ほど玉村先生が進級判定のことで  
ケース・バイ・ケースでやつたケースがある

というようなことをおつしやいましたね。  
玉村 卒業というか、留学生別科ですか  
コース修了ですね。

大鉢 そういうことは従来のわれわれの同  
僚なんかと話しますと、甘いと言う考えを  
示す人もおられます。われわれのものさしで  
はかりますと、甘くしているというふうな見  
方になるのですけれども、留学生の方は留学  
生のやつぱりスケールがあるわけです、も  
のさしが。そうしますと、決してそういうもの  
は甘くはないのじゃないかという気が、私は  
するのですけど。ケース・バイ・ケースとい  
うことのいちばん顕著な例が、われわれの創  
立者新島先生がアーモストカレッジで受けら  
れた教育に対して、バチエラー・オブ・サイ  
エンスというのをもらわれたのですけど、バ  
チエラー・オブ・サイエンスというのは例外  
的につくられたようですね。それはたしか、  
古典語が、必須科目なのですけど、新島先生  
は日本国から行かれましたし、ラテン語なん  
で取りつく島がなかったのではありません。で  
すから、それをやれなくてもバチエラー・オブ・  
サイエンスという形のデグリーを出された  
と。留学生を受け入れる場合には、いまま

同志社大学 国籍別外国人留学生受入数

1990. 5. 1

国 籍	年度 1978	年度 1979	年度 1980	年度 1981	年度 1982	年度 1983	年度 1984	年度 1985	年度 1986	年度 1987	年度 1988	年度 1989	年度 1990
韓 国	3	2	3(1)	1	6	11	20	33	49	54(1)	58	61	64
アメリカ	24(21)	25(24)	27(26)	29(28)	24(24)	33(33)	34(33)	41(39)	43(41)	50(50)	46(45)	56(54)	57(54)
中 国				1	4	5	6	9	14	21	33(1)	47	69
台 湾	3	3	6	7	9	9	7	8	12	13	14	16	23
西ドイツ		1(1)			1(1)				2			1	2
マレーシア												1	2
アルジェリア												2	
ブラジル		1					1	1	1	1	1		
インド								1	1	1	1	1	
インドネシア								1	1	1	1		
シンガポール								1	1	1	1	1	2
スイス									1	1	1	1	1
タンザニア											1	1	
ベトナム						1	1	1	1	1	1	1	1
イラン	1	1					1	1	1	1	1	1	
ニュージーランド			1	1									
南アフリカ		1(1)											
カナダ						1		1	1				
オランダ						1(1)					1(1)		
イギリス											1(1)		
ガイアナ							1			1(1)			1
タイ							1(1)						
チリ								1	1				
フランス								1	1	1			
スペイン											1	1	1
イスラエル												1	1
ベルギー												2	2
オーストラリア												1(1)	1(1)
ポーランド													1
合 計	31(21)	34(26)	37(27)	39(28)	44(25)	61(34)	72(34)	99(39)	130(41)	147(52)	165(48)	193(55)	227(55)

( ) は内数で Associated Kyoto Program で文芸部に在籍する学生

のわれわれの学位を、あるいは単位を認定するスケール、もちろん基準なのですけれども、それと違うスケールをもって判定してもいいような気がするのですけど。

**玉村** 学位とか学士とかとちよつと違うのです。つまりさつき言いました例は、その前段の日本語教育の課程修了でそれを終わらないと、次の本来の配属校に行かせないというふうに文部省の取り決めになっているので、そういうところで漢字がなかなかいい点とれないとかというのを、美術の学生だから二度目にはこれは次の本来の絵をかくところに行かせてやろうというふうに考えたというわけです。ですから、もしも専門科目だったらよく理解するということが甘やかすということ、私は、私とは違うと思います。それはそれぞれの部署でご検討いただいた線で決まるのじゃないかと思うのですけど。

**大下** 留学生のほうの側は、こういう問題をどういうふうに考えているのでしょうか。その辺、いちばん留学生との接触を広く持つておられる長合さんに伺っていきたいと思います。特に国語教育とか、いままでお話しが出た面に即して何か。

**長合** 日本語教育のほうなのでしようね。

**大下** 広い意味でね、学業と。

**長合** たしか玉村先生もおっしゃったように、バックグラウンドが漢字圏であるか、非漢字圏であるかで決定的に違うと思います。というのは、たとえば留學生に何人か集まってもらつて話をするでしょう。そうすると、もちろん国籍でどうこうというのは非常に乱暴かもしれませんが、一つの例として言えますのは、たとえば韓国の學生は非常に日本語の中でやつぱり韓国の學生は非常に日本語ができるのが多いですよ。特にしゃべることについてはわれわれ以上にしゃべれる學生が結構おりましたね。話し合いますでしょう。そうすると、ほかの国の學生はしゃべる機会がないのですよ。スピードの面でもいろんな面で話に入つていけないのですよ。特にしゃべるほうはそうですし、読むほうでも漢字圏で育つているならば、当然、日本語に対しての親近感といういいですか、基本的な部分でずいぶん違うと思うのです。だから特にアメリカとか、ヨーロッパから来た學生にとつて、日本語の片仮名があり、平仮名があり、さらに漢字があり、特にしゃべる言葉と書く

言葉がひどく違うといつたところについては、非常にプレッシャーみたいなものを感じていると思います。また同志社なんかですと、よくあるケースですが、英語ができれば日本語ができなくても受け入れてくれると頭から信じ込んでいる學生が結構多いですね。同志社だつたら英語で授業をやつてくれるだろうし、そういうコースは当然あるのだと思ひ込んでいます。だから特別學生でも日本語ができなきゃだめだと言つと、非常にげん顔をする學生が結構多いのです。だから、その辺について同志社の一般的なイメージとしてとらえられている部分と、実際にわれわれが日本語ができないとだめだと言つてしよう、そのこととの間にギャップというものがあるつて、同志社を受験する學生にとつて、そのこととはしばしば一つのショックとしてとらえられているということはあるですね。

### 手づくりの教育

**大下** やはり最初、国際課長がおっしゃつたように、これは理念と制度との両面の問題だと思つたのですけれども。留學生の留學目的が何であるか、先ほどから言つている留學生

の間の相違がある。それから四年間の学部  
の留学生生活をしたという中にも、漢字圏とそ  
うでない国の人、さつきはアマニ君というタ  
ンザニアから考古学の勉強に來ている学生の  
ケースがちよつとありましたけれど、それぞ  
れのケースで違ふと思うのです。それを一つ  
の網にかけてしまふのじゃなくって、幾つか  
のカテゴリーで、同志社で受け入れる理念と  
いうものをはつきりしていく。やはり手づく  
りで留学生を育てる気持ちがあつてはだめだ  
と思ひますが。

木田 文部省の「留学生政策」なんか読ん  
でますと、特に発展途上国の人材養成とい  
うことを、日本の大学が担わなくちゃならな  
いような言ひ方が出てくるのです。私はちよつ  
とそれは思ひ上がりだと思つてゐるのです  
よ。というのは、やつぱり留学してきた学生  
個々に、本当にその人を考えて教育をしてあ  
げるといふ、そういう態度が私は基本的には  
必要じゃないかといふふうには思つてゐるの  
ですけれども。

### 留学生の要望と

#### 受け入れ校の取り組み

大下 私も十万人構想の趣旨を伝えるミッ  
ションに加つて、東南アジアの幾つかの国に  
行つたのですけど、やはり向こうの学生のニ  
ーズと、こちらの受け入れとが、まだ十分  
からみ合つていない。それぞれの学校が何を  
求める学生を受け入れるか、そこをはつきり  
させる必要があります。慶応だと思ひますけ  
れども、それぞれの国を回つて、自分の学校  
に受け入れたい、留学生を探してゐる。その  
ためには自分の学校が何を与えるのかはつき  
りさせなければならぬ。こういう姿勢で留  
学生問題に積極的に取り組んでゐる学校もあ  
る。

玉村 それぞれの留学生の本国の事情とか  
本国での教育の内容とかによつて、日本に來  
たときのなれといひますか、そういうもの  
がだいぶ違ひますね。

大下 そうですね。なれと期待度みたいな  
ものがね。

### 本国での教育の背景と

#### 学位のほしい留学生

玉村 制度的なことから言ひますと、これ  
は例外はいっぱいあると思うのですけど、大  
ざつぱに言つて、欧米系の学生は大体実力  
をつける、学位とか学歴とかにはあまりこ  
だわらない。それからタイなども含めましてア  
ジアの学生はとにかく学卒、それからマスタ  
ー、できればドクターといふふうには、本  
国で特に研究者でいく場合には、Ph.D. かなんか  
持つてないといひけない。日本語をやつて  
いても、日本ではなかなかもらえないからマ  
スターは日本でもらい、一たん本国に帰つて、  
そしてまた奨学金をもらつてアメリカへ行  
つてPh.D. をもらうといふことが多いので  
す。ところが、欧米の学生は日本に來てど  
ういふことをするかといふと、専門分野がは  
つきりして、初めから論文を書くための  
資料集めをして、論文を書くとか研究とい  
ふことを考へて、わかれわかれによくわか  
るやり方で勉強します。いま私が特別学生で  
預かつてますドイツの青年は、日本語は本  
国でやつてたのですけど、來たときは会話な

んかは大だいたいようすでした。でもいまはテンポは早くないですが、ものすごく厳密な表現ができます。「必ずしも何々とは言えませんが、これだけではなくて」とか、そういう非常に厳密な表現ができるわけです。日本人学生と同じように話していても不足はないというぐらいですけど、本人は別に同志社でなんか学位をとるかそういうことじゃなくて、本国に帰つてとるために、日本で思想哲学関係の文献を読む力をつけたいと思つて勉強しているわけです。ところが、アジア系の学生はどちらかと言いますと、実力もさることながら、年限に相応してちゃんと資格がほしいですという傾向が全体に強いんですね。

おもしろいのは文学の講義、私は文学担当じゃないのですけれども、ちょっと初歩的なことを話しますと、アジアの学生はなにか教育的な取り方、そういう読み方が多いですね。ところが、「一房の葡萄」という有島武郎の短編があるので、ああいうのを読ませましても、アメリカの学生とかはものすごく反応がよくって、やっぱり、なるほどなるほどと思うような意見が出るのです。そういう意

味で、本国で文学教育というのはどういうふうになされているかというのがよくわかりますね、逆探知で。先生の言ったことを丸のみにして覚えるというのがタイとか中国とかの傾向です。欧米のほうはどちらかというところも聞くけれども、一応批判的に受けとめて自分のものを創つていくという、なんかクリエティブな方向がいつもあると思うのですけどね。そういうこともわれわれは承知していなければ、いろんな国の学生を預かるというときに、多様な対応ができないと思ひます。同時にまた同志社として独自の一つの理念というものが必要であると思ひます。

#### 留学生受け入れのメリット

大下 生活面で、日本の生活が楽しいというよりは、苦勞している留学生が多い。日本の学生と留学生との交流では、「留学生友の会」ですか、そういう組織もあるようですけれども、留学生の生活面についてお話しして、締めくくりたいと思うのです。そのときに一つのポイントとして、留学生を受け入れるメリットというか、同志社として留学生を受け入れることで一体何のプラスがあるのか、こ

のあたりまえの点が指摘できます。制度としての大学面より、学生として留学生のいる学校で学ぶということに、どういうプラス面があるのだろうか。同志社のような規模を持つた大学は、もう少し奨学金も留学生のために出せばいいと思うのですけど、それには、外から来た者を受動的に受け入れるというのじやなしに、留学生がいることが何をプラスしているのかという点ですね。やもすると、国庫助成がちよつと多くなりますというような次元になつちやう(笑)。国庫助成があるうがなからうが、留学生がいる大学になるということが一体、同志社のためになるのか。いや、面倒くさがふえるだけなのか、そうしたこと考えないと、留学生の生活面にまでかかわつていく積極性が出てこないのじやないか。その辺を視野に入れていたでいて、一言ずつお話しただければと思うのですが――。

太田 『日本で学ぶ留学生』、こういう本がありまして、著者は慶応大学の新聞研究所におられる人なのですけれども、実態調査をずつとやっておられて出されたものです。こういうことが書いてあります。『在日留学生の八

割合以上を占めるアジアの国々にとって、今日でも日本は留学先として人気ナンバーワンではないのである。知的創造の場として日本の大学にどれほど国際的競争力があるのだろうか。こうした現実の中で真剣に考えなければならぬのは、数ではなく、質のよい留学生を迎え入れるにはどうすればよいのかということであろう。つまり学術交流、文化交流の場として魅力的な日本となるための方策を考えることである。その中にはもっときめ細かな学生指導と、わざわざ学びに来るに値するような独創的な研究の活性化が含まれることは明らかであろう。輸入学問ではだめなのがある。結局、留学生が問題にしていることは日本人学生にとっても大きな問題なのであって、外国人留学生の問題を考えることは、日本の大学、大学院教育のあり方を根本的に問うことなのである。

留学生を受け入れて教育するということは、日本人学生の教育にそのままがつていくことであって、その受け入れをどういう形で行うのかということを実際に考えることが、同志社の大学というものをいかに魅力あるものにするかということに、そのままつな

がっていることだと私は思いますけどね。

大下 いちばんのポイントはその辺にあると思います。

大鉢 私はメリットというのは、先生がおっしゃったのと関連すると思うのですが、国際的に交流をしていかななくてはならないわけですね。一人の人が行くよりも一人の方に来ていただいで、それで学生さんが直接、交流ができるということは、非常に得るところがあるのではないかと。その中からやはり自分たちと育ちが違う、文化が違う、そういった考え方の違う人とも、相手を認めながら生活をしていけるというような体験が、やはり留学生を受け入れることによってできるのではないかと。ということは、同志社大学として留学生を大いに受け入れて。

それからもう一つ、そういう場合にままで話されたことは、ほとんど勉学的な面だけなので、一人の人間が成長するには、そういった知的なもの以外に、生活面があるわけですね。そうすると、その生活が大学でサポートされているというように、あま

よくしていくのじゃないかという気がしますがね。われわれがよそへ行くときでも、向こう側で住むところがあるかどうかというのは、留学先を決める決定条件の一つになってますから、同志社の学生のためのそういった設備がますます充実していく方向で考えられているのも一つの方向というように気がしますけれども。

#### 留学生と交流の場の開設

太田 欧米系の学生というのは一見ただけでわかるでしょう、外国人留学生だと。ところが、アジア系の学生なんか、たとえばキャンパスの中で顔を会わしたってほとんどわからないということがあります。田辺にも留学生センターではないけれども、留学生のための部屋は一応設けてあるのです。ところが、アルバイトですらそこに人をつけることができないのです。そういうものが、日本人学生にも開かれた形できちんと設定されますと、日常的な交流ができるのです。私は中国語を教えますが、いまの学生たちは習った言葉を現実に使ってみたいという、そういう志向は非常に強いですね。それで、留学生は

たくさんおるのだよと言うのだけれども、だが留学生だからかわかんわけですよ(笑)。きちんと場所としても開かれてありますと、そこへ行けばとにかく交流ができるというふうなことにもなるだろうと思うのです。だから国際交流センターというふうな構想もあるようですけれども、できるだけ早い機会に田辺でもそういう開かれた場がつけられることが、同社社の学生にとつても、本当に国際主義が名目でなくって、日常的な次元で実現していけるというか、あるいは身につけたものに、なるだろうというふうに思っているのですけれども。

**長合** 大体もう先生方おっしゃったとおりなのですけれども、結局留学生を受け入れていくということは、日本人自身、われわれ自身をよりよく理解し、知るためでもあると思うのです。違う視野で、違う発想で留学生はわれわれを見てますから、日本を評価してますから、ときには痛みを伴うような辛辣な批判を浴びせられることももちろんありますけれども、しかし日本自体が、大学が、われわれ自身が成長していく、また、よりよくなっていくためにも、もつと異質なものととの摩擦

を通じてさらに自分を磨いていくというぐらゐの気構えが要求されている時代だと思つてですよ。だから、留学生を受け入れるというのは、ある意味ではわれわれ自身のためでもあるという、そういう気持ちというのが大切なのじゃないかと思うのです。

彼らの生活面、特に日本人学生との交流については、もつともつと特に国際課なんかいろいろんな場を設定してやらなきゃならないとは思つてますけれども、たとえば、ことしできた向島学生センターなんかは、日本人学生と留学生とが共同生活をする場を京都市のほろろんな形で、日本人と外国人との接触の場を、生活の面でも持つことが必要という認識は高まつております。大学のほうでも、もつともつと積極的に、日本人学生と留学生との、教室だけでなく、生活を通しての交流が進むようにしていく必要があると思うのです。それは当然、痛みとか摩擦を伴うと思うのですけれども、これを積極的に受けとめていくというのですか、その辺の意識の転換というのか、これはやはりしていかないといけない。

話は大きくなりますけど、二十一世紀に向けて日本が生きていくためには、それをやらなとだめだと思つたのですね。

**木田** おっしゃるとおりだと思つてですよ。というのは、私、特にアジア系の留学生と接触が多いんですけど、そのアジア系の留学生の中には、たとえば接する先生から一種の差別感を感じることもある、学生からもそういうことを感じることもあるということも訴えられたことがあります。これは何べんかあるのです。やはりそこところは留学生の受け入れの問題ということは、同時にこれはわれわれがみずから振り返つてみる問題にもつながっているのだということを、この際、改めて考えてみる必要があるだろうと思いますね。

### 留学生といつしよに学ぶ

**大下** この間も、一般教育の英語を教えている嘱託の先生からうかがつたのですが、たまたま中国からの留学生がクラスにいて、英語はあんまり力がない。英語をとにかく理解してそれをまた日本語で書かされる、むだな努力をしているように、その学生は感じるら

しい。授業後しよちゅうその先生のところへ来て、自分の苦勞を訴えながら、いろいろ質問をする。そうすると十分、二十分ぐらい昼休みの時間が減つてしまう。その先生はいままで経験したことのない、いい経験だと喜んでおられるけれど、どう見ても負担がふえている。そうした面をくみ上げていくような改革が、制度上でも意識の上でも必要になってくるのだと思います。

「国際色豊かな大学」といったカタログでは学生は感心するけれども、大学に入ってきたら自分の隣に、同じアジア系で見たところは日本人と変わらないけれども、日本語で困っている留学生が座っているかもしれないというところは、考えもしないで教室へ行く。教員の場合でも、自分のクラスの中にそういう留学生がいるというようなことは、考えもしないで授業をすることも多い。しかし、国文であるとか日本史であるとか、留学生が非常に多いところがでてきました。この傾向は、いやでも、広がっていくですから、留学生についてお互いに考えるのに、この座談会が役立てば非常に幸いじゃないかと思うのです。

終りにぜひおっしゃりたいことは――。お

つしやつていただいたらどうでしょう。

玉村 昨年の秋に、太田先生たちの企画で田辺で一日午後時間をとりまして、「世界を結ぶパネルディスカッション『同志社に学んで』―外国人留学生として―」を催しました。中国、韓国、アメリカ、スイスの四方国の学生に、自分の国と、それからいまだんな勉強をしているか、同志社についてどう考えているかというようなことを話してもらいました。

日本人学生が、百人ちよつと超えたかもわかりませんが、立って聞くぐらいのおおぜい参加しました。こんなにいろんな国から留学生が来ているということを知らなかつたという、日本人の学生がだいたい書いてね。だからいい機会だつたと思うのです。それから世界地図を広げまして、私の故郷のまちはこちら辺ですとか、揚子江のこの辺ですとか留学生が言つてまして、非常によかつたと思うのです。複眼的に、あるいは比較とか対照とかということを思わず知らず学んでいくということになりました。韓国とか中国の場合、日本人のいまの大学生たちは、過去の戦争とか日本軍が行つたというようなことは、普通は全然考えてない。しかし、彼ら、彼女らはそ

ういうことをずつと教育されてきてますから、ときどきそれが末端でちらつと出ることがありまして、日本人のほうは勉強し直さなうといけないということがあるようです。

それから生活にからみやすけど、アジアの学生は下宿を探しにくい、特に韓国の学生は何回か断られるということがありました。下宿が決まりかかつて、最後韓国人ですと言つたら、なにかほかの理由で断られるといううなことが何回もありました。一緒に歩いて行つた日本人学生は、ものすごく苦労したと言つています。こういうこともだんだん前進すると思いますが、そのことやらアルバイトのことやらが、日本語の学習とが向学心だとかにすごく否定的影響を与えることがあります。ともかくいろいろ日本人の単一民族的な考え方から脱却をするということでは、留学生といつしよに学ぶということに非常に大きなメリットがあると思えますけれども。

大下 私の司会も十分でございます、この時間をもう少し有効に使えたかもしれませんけれども、その点はお許しただいて、これで終わらしていただきます。

（一九〇年八月九日収録、於有終館担当理事室）